会長退任の挨拶

21世紀に向けて

㈱NTTデータ　相談役　　青木　利晴

2006年4月より2年間，本学会の会長をつとめさせていただきました．思い返せばこの間さまざまな問題がありましたが，どうにか無事過ごすことができましたのは，副会長はじめ理事の方々，事務局の皆様，そして会員の皆様のご指導とご支援のおかげです．心から御礼申し上げます．

就任の際感じましたことは，ORという工学が社会との関係について，曲がり角に立っているということであります．そして2007年に折りよく創立50周年という大記念事業がありましたので，これが21世紀に向けて学会が新たなスタートに立てる良い機会であり，これを成功させるよう皆様とともに努力することを決意しました．

就任挨拶でも申し上げましたが，IT化の浸透で社会が大きく変わってきています．個人の生活スタイルや価値観が変わり，それによって企業が提供するサービスや商品が新しく生まれ変わり，産業の構造そのものも変わりつつあります．企業経営からみれば，IT化の浸透で市場のデータや経営情報が容易に手に入り処理がしやすくなってきています．またこれらの大量の情報を駆使して適確な経営判断を行い新商品を開発していくことが，競争に勝つ鍵となっています．まさしくORの出番です．

ところで今まで経営者としてORの重要性を認識しているつもりでしたが，OR学会の会長としてOR側から産業や企業経営を見る立場になると，改めて学問と実際との間の距離の大きさに気づきました．ORは工学の中でも最も現実の経営に近いものであるし，それこそがORが今後発展する重要なポイントであると思っています．また他の工学と異なり特定の産業と密接な関係があるのではなく，横断的基盤的なものであります．したがって今後発展する新しい産業分野に積極的に貢献していかなければ，存在価値を失ってしまいます．

今産業界からORに対して大きな期待がかけられていますが，残念ながら産業界の方から積極的なアプローチは感じられません．それは横断的基盤的工学としての宿命でしょう．むしろ我々の方から積極的に出ていき，提案しなければなりません．そしてORは工学です．社会に具体的に役立ってこそ価値があります．課題が与えられたときにそれをいかに巧みに解決するかだけではなく，新しい課題を見つけ出す，価値を創造する，これがあってはじめて工学として21世紀に本当の存在感を持つものになると思います．

学会には，論文を投稿したり研究会発表会に参加するアクティブな会員だけではなく，自分の将来に何らかの関係があるかもしれないと期待して会費を払い続けているパッシブな会員もおられます．いろいろな会員の期待に応えることも今後の重要な課題でしょう．

昨年は一年間にわたってさまざまな50周年記念事業を行ってまいりましたが，どの事業に対しても，ORの将来を皆で考えるものになるよう努力いたしました．ORとしてきわめて大切なときに，学会のお手伝いができたことを誇りに思っています．

会長を退任するに当たり，21世紀に向けてORの新しい展開と本学会の会員の皆様のご活躍を心から祈念いたします．